

昨年のセミナーの続き

コロラド州ボルダーに本拠地を置く、ロールファー[®]養成の教育および研究機関Roll Institute[®]では、身体の統合のために「有効な技術や概念」を取り入れつつ、今なお定義の見直しや発展のための検討が続けられている。昨年、教員らが中心となって「ロールフィング[®]を再検討するうえで、エネルギーワークの探求」というテーマで3日間のセミナーが開催された。

様々なタイプのオフ・ボディ（触れない動きかけ）が紹介され、その中で自分のワークをデモする機会を得た。ロールドワークと呼んでいる私のワークは、教授陣の目には、どの技法とも似ていない斬新なアプローチとして映ったようだ。加えて実際の構造変化を伴う実践例を示したこともまた、彼等の興味を引くこととなり、今年のミーティングの前半は、私のワークを紹介することとなった。

再びアリゾナへ

3月のフェニックスは、ベースボールシーズンと重なり、心地いい気候で観光客も多い。メジャーリーグの半分がここに集まり練習試合を行うために、最も人気の高い時期。

昨年と同じB & B ZenYard Guesthouseに宿泊。クラス前日に今回コーディネーターを引き受けてくれたキャロルとレイを交えて打ち合わせ。4日間を通して、ロールドワークをロールフィング[®]10シリーズの中に組み込むための概念と実践について紹介するのがワークショップの趣旨である。

ロールドワークとは？

ヒトが成長する段階でまず最初にやることは、自分の重さを母胎に「ゆだねる動き」（ロールド）である。私たちが世界と関わりを持つ際の

ロールファー、仲間たちの待つアメリカに！

ロールフィング追求記。

パート2

ロールファーの田畑さんから編集部に連絡が。「昨年、開催されたセミナーの続編に行ってきました」それは興味津々！今回は自身のワークを披露する模様。はたして信頼する仲間たちからの反応は？

文 ● 田畑浩良 Illustration by Yuri Mizutani

根底にある活動と考えられている。細胞レベルでも、試験管内で正常な細胞が生存・成育するためには、接触面に対するロールドが不可欠であることが知られている。細胞の集合体である身体が、その重さをその場に十分に預けることができれば、心身ともに落ち着きを取り戻し、次に周囲の環境に対して広がろうとする動きが自ずと生まれる。触れたところを安全な足場であると受け手の身体が認識すれば、それがきっかけとなって、萎縮して固まっていた組織に動きが回復し、周りの組織とのつながりや空間的な広がりを取り戻す。ロールドワークは、すでに身体が知っている原初的な「振る舞い」を利用している。

前半〜初日

自分の倍以上のキャリアのある先輩相手に、しかも英語でプレゼンするというのはあまりにチャレンジすぎるので、当日までなるべく考えないようにしていた。なにしろ鋭い観察眼を持ち、これまで多くの監督をしてきた教授陣に小細工は通用しない。ただ、ロールファーの強みとしては、身体技法は元々が非言語的なやりとりであるから、実際にやっているところを見せるのが手っ取り早い。

まず、このワークの鍵が、プラクティシヨナ

ーの感覚・意識状態にあることを説明する。立ち位置や間合いの重要性にもふれながら、数秒程度の軽いタッチでデモンストレーションを進める。今回モデル・クライアントとなってくれたキャシーはベイエリアからの参加。見守る時間をしっかりとっていると、身体が横たわっている台に対して預ける反応が進み、仙骨に自発的な動きが伴う深い反応が引き出される。受け手の高い応答性に助けられて、出だしは好調。

集まってくれた面々は、こちらからの投げかけをすべてポジティブに理解してくれるから、とにかく楽しい。さまざまな視点からとらえられることで、このワークの解釈がどんどん立体的になっていく。優秀な教師というのは、学ぶ姿勢も一貫してすばらしい。教えるのがとても楽に感じる。ロールファーは頭ではなく、たえず身体感覚を介しているためか、こちらが言わんとすることへの理解に滞りがなく、すべてがスムーズだ。自分が蓄積してきた情報を惜しみなくシェアし、それを好意的にたくさん受け取ってくれるプラスの循環に大きな喜びを感じる。

2〜3日目

このワークで用いる様々な種類のタッチを紹介。どれも基本的には触れるか触れない程度かあるいは触れていても圧力は極めて小さい。口



ルファーが知覚をシフトさせ、身体をか弱い細胞という泡の集まりとして認識するだけで、触れ方やタッチの作用・印象が根本から変わってくる。対象としての受け手をどのようにとらえるかによって、受け手の反応性は大きく影響を受ける。ロルフリング10シリーズのうち第1から第3セッションのデモを立て続けに行っている。デモの後は、参加者同士の交換セッション。自分が示したことを、大先輩がそのまま練習している様子はなんともいえない不思議な光景である。創始者ロルフ博士から直接学んだという大先輩も、紹介した方法をえらく気に入ってくれたらしく、ええ？ こんな軽いタッチで変化するのか？ という意味を込めて、苦笑いしながら、「S.M.I.I.」を連発していた。

ワークショップ最終日

午前中の第4セッションのデモは特に深い体験となつて、モデルになつてくれた先達から、これまで数回と受けてきた様々なセッションの中で、最も印象的だった！ との感想をいただく。午後は気を引き締めて、最後のデモ。第5セッションは、ジェフリーをモデルに通常より少し応用的な体勢でワーク。ちょっと欲張ったか、通常どおりのほうがよかったかもとちょっと反省。最後は、感謝と共に無事終了。オリジナリティに敬意を払い、若輩からも字ぼうとする姿勢、経験や年齢、ステイタスに関係なく気さくに接してくれるすばらしい仲間との充実した時間はあつという間だった。

後半「エネルギーに関するセミナー」

新たに3名が加わり、昨日までのクラスとは別の雰囲気、昨年のセミナーの続き。エネルギーが盛り込まれたロルフリングの再定義についてジェフリーから説明があり、特に異論もなくスムーズに合意された。そして、彼から現象



ジェフリーにデモンストレーション中。

学を応用したエネルギーワークの紹介。観るこ
と (Seeing) 自体がワークとなる体験実習。ペ
アを組んで、プラクティショナー役がただ見守
り、相手の内在する捻れや傾きなどの固有のパ
ターンが表に現れてくるまで見守る。そこにわ
ずかに介入することで、統合が引き出される。
昨日までの私のワークショップと同じ文脈にあ
る内容だ。

エネルギーワークは、下手をすると何の結果
も得られない怪しいもので終わってしまう。ま
た、いくら有効な術であっても、ただ足すだけ
では統一感のない混ぜ物ワークになってしまう。
そうならないのは、ロルフリングの根本方針が
しっかりしているからにはかならない。それを
まとめたジェフリーがこのセミナーの発起人だ
る意味は大きい。

最終日は、これまでの内容を総括するように、

※1 ロルフリング (正式名称 Rolfing Structural Integration) は、米国ロルフ・インスティテュートの登録商標。 ※2 Rolf Instituteの機関誌『Structural Integration』の2012年6月号に方法を掲載。 ※3 Aposhyan, Susan, Natural Intelligence, Baltimore: Williams and Wilkins, 1999, pp64-67. ※4 イールドは、試験管内の培養細胞の振る舞いにも観察され、ほとんどの正常細胞は、生存と増殖のためには、まず足場を要求とする。これは足場依存性と呼ばれ、細胞生物学ではよく知られた基本性質である。いくら栄養が足りていても、まず足場に委ねる動き、そしてさらには周囲の空間に対して広がろうとする動きによってはじめて、生存と成育が可能となる。仰向けで休息するというのは床に対するイールドであり、ヨガでいうところの死体のポーズに該当するが、これはかなり奥深いポーズと位置づけられている。日々の疲れを次の日に持ち越さずリセットできるかどうかは、寝ている間に床あるいはベッドにどれだけ脱力してうまく休息できるかにかかっている。

ペアを組んでマツサージテーブル上での実習。

ここで、ちょっとしたいわずら心が芽生え、初顔合わせのトーマスからワークを受けている間、プラクティショナーの意識状態で受けてみることにした。もちろん、トーマスにはちょっと失礼なので内側にそれを秘めたままでやり過ぎた。ところが、そのまま何ごともなく終わるはずが、こちらを観察していたサラが、「ピロは受け手になつているのに、プラクティショナーモードになつているように見えた」という、鋭いコメントを発表。こちらの内側の状態が、すっかりバレていた。彼女は、シアトルの大学で鍼灸を教えているというが、感じ取る力はさすがである。まいった。改めてレベルの高い集まりだったことを最後に思い知ったところで、閉会。

ワークショップを終えて

これまで自分なりに工夫し探究してきた方法を紹介し、敬愛する先生たちに喜んでもらったワークショップは、このうえなく幸せな時間だった。うれしいことに、昨年のセミナーで私のデモを見た後教員の何人かは、イールドワークをトレーニングのクラスで使ってくれているという。今回の会合の成果が次にどんな流れになつていくのか、彼等との再会も含め来年も楽しみである。

田畑 浩良

たはた・ひろよし ● 那須塩原市生まれ。(株) 林原生物化学研究所の研究員を経て、1998年米国 Rolf Institute によってロルフファー™ として認定され、以降 Rolfing SI と Rolf Movement™ の個人セッションを提供。数々の認定トレーニングの授業助手を経て、2009年同 Institute 所属のムーブメント部門の教員となり、ロルフファーの継続教育を提供中。福島でのキッズ・ロルフリングや一般向けワークショップも開催中。

